

「出エジプトの旅」

朝ごとのメール集会で「出エジプト記」を読み始めた。

この世にどっぷり浸かって生活していた人が、イエス・キリストを信じ「神の国」を目ざして歩む道は、イスラエルの民が、奴隷の地エジプトを出て約束の地カナンに向かう旅路に似ていると聞く。今回「出エジプト記」(まだ17章だが)を読みながら、なるほど出エジプトとは、この罪の世から天の御国を目ざして歩む歩みそのもの、いや私たちの人生そのものだと思わされている。

何よりも出エジプトは、イスラエルの民の考えや、努力によってなされたものではなかった。イスラエルの民はただ、耐え難い労働のゆえに助けを求めて叫んだに過ぎない。しかし、その嘆き声から出エジプトは始まった。

主はモーセに言われた。

「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

人間の一番真実な祈りは、ただ「助けてください」と、嘆き叫ぶ声であると聞いたことがある。ふと、義父の最期を思い出す。老いて病み食事も喉を通らなくなって、食べることにテレビのニュースにも意味を見いだせなくなり、

何よりも何のために生きてきたのか、これで良かったのかと、苦悶する日々だった。その苦悩の中から発せられた「助けてくれや」と、しぼり出すような声を私は忘れない。キリスト教に決して好意的でなかった義父が、手をとって祈る祈りに心を合わせ、いつしかその顔には、晴れやかな喜びがみなぎっていた。

神様は生きておられる。だから私たちには希望がある。どんな状態になっても、絶望のただ中でも、人は叫ぶことができる。「助けください」とひれ伏すことができる。

出エジプト記7章から12章までは、エジプト王ファラオがイスラエルの民を去らせるまで、エジプトの国に下された10の災いが記されている。血の災い、蛙の災い、ぶよの災い、あぶの災い・・・と続くのだが、そこには「知るようになる」という言葉がくり返されている。

「わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人々をその中から導き出すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる」

「あなたは、我々の神、主のような神がほかにいないことを知るようになります」

「あなたはこうして、主なるわたしがこの地のただ中にいることを知るようになる」

「あなたはこうして、大地が主のものであることを知るでしょう」

「わたしがどのようなしるしを行ったかをあなたが子孫に語り伝え、わたしが主であることをあなたたちが知るためである。」

神様は、私たちの人生に起こるすべてのことを通して、私たちが神様を知るようになることを願っておられるのだ。たとえ災いと見えることでも、そのことを通して神様を知ることができるなら、それこそ真の幸いとなる。人間にとって、造り主なる神様を知るに勝る幸いはないのだから。知ること、それは命に至る道である。

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」ヨハネ 17:3

エジプトを出たイスラエルの民の行く手には、岩石と砂しかない荒野がどこまでも続く。その40年の荒野の旅は、天からのパン「マナ」によって養われた。そのことが詳しく書かれた出エジプト記16章を読んだときには、続けてヨハネ福音書6章も読んでみた。すると、その二つの章がどんなに重なり合っているか、それでいて旧約と新約の違いが、光りがさすように明らかになる思いがした。

ヨハネ福音書6章の1～15節、イエスの周りに集まった5千人の群衆にパンを与える記事、それは「あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる」と、天からマナを降らせられた奇跡物語の新約版ではないか。「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に欲しいだけ分け与えられた。・・・人々は満腹した」とあるが、しかしイエスの奇跡は、5千人が満腹しただけでは終わらなかった。パンを食べて満腹した人たちに、イエスは言われた。

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である」と。

天からのマナによって、イスラエルの民は約束の地カナンに着くまで養われた。イエスという命のパンによって私たちは、神が人と共に住む永遠の都に着くまで養われ、その喜びの日は終わることがない。

「わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒れ野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを

食べるならば、その人は永遠に生きる。」

出エジプト記は、まだまだ続きます。朝毎に聖書を読み、命のパンを食べる喜びが広がっていきますように。